ぬすまれた町

吉田足日

講談社文庫

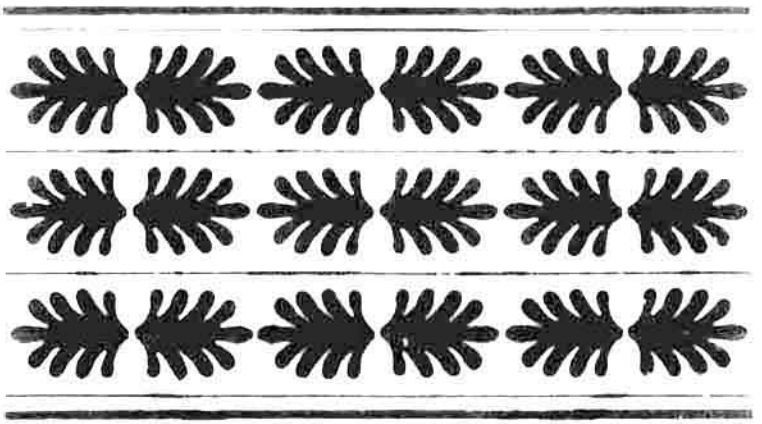
講談社文庫

ぬすまれた町
古田足日
昭和54年1月15日第1刷発行

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
電話　東京（03)945-1111(大代表)
振替　東京 8-3930
デザイン　亀倉雄策
製　　版　株式会社まゆら美研
印　　刷　株式会社東京印書館
製　　本　株式会社千曲堂
© Taruhi Furuta 1979
Printed in Japan
0193-380795-2253(0)　380円
(落丁本・乱丁本はおとりかえします)

ぬすまれた町

古田足日



まえがき

ぼくは、ある日、ある時、ひとりで喫茶店にすわって、ことしの野球の日本選手権は、どっちのチームが勝つだろうかと、考えていた。

すると、

「そりゃ、南海さ」

という声がした。ぼくはどきっとした。ぼくも南海が勝つと思っていたからだ。

ふりむくと、うしろの席に集まっていた学生たちだった。と、また、声がきこえた。

「南海だよ、南海にきまってる」

学生たちのうしろの席のサラリーマンたちだ。

とたんに、ぼくの頭のなかに、ひょいと日本の地図がうかびあがった。ヒシがたの北海道からはじまって、長っぽそい本州、本州のしっぽの下の小さな四国、頭のない大男がかたうでのこぶしをかためたような九州——この地図の上を、何十万、何百万の、目に見えないほど小さいアリのむれが動いていた。アリのむれは話していた。

「南海」「南海」「南海」「……」

「巨人」「巨人」「巨人」「……」

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

ぼくが考えているのとおなじことを、日本じゅう、何百万、いや数千万の人たちが考えている。顔つきや、着ている服はちがっていても、この瞬間、何百万の人間の心のなかはおなじなのだ。

そうだとしたら、ぼくはなぜフルタ＝タルヒという名まえなのだ？　みんな、見わけのつかないアリのように、おなじことを考えているのだから、名まえなど、なくてもいいではないか。1号・2号・3号……でいいのではないか。

だが、ぼくはとにかくフルタ＝タルヒだし、いまこの本を読んでいるきみにも、りっぱな名まえがある。

なんのために名まえがあるのか？

このことをいっしょに考えていこう、諸君！

目次

まえがき……3
第一章　ユーカイ事件
テレビからとびだした……11
記者会見……22
ミドリねえさん……33
ちいさな冒険……42
アイスクリーム＝キャラメル……50
武装警官隊……57
刑事と少年探偵……66
ナワバリあらし……74
ススム見つかる……82

第二章　ゼンミツレン
市長は辞職せよ……92
ディズニイ＝ランド……99
建設促進同盟……110
市長選挙……118
ふしぎな船……130
海底トラックはなぜたりない？……137
ハヤブサ丸……145
インスタント＝ブタ……153
デブとボロシャツ……163
第三章　グループ＝カゲ
なぐりこみ……177
ササキ＝タダヒコ……188
町をもとどおりに……194
おどる影……202
船長室……215
海賊のおきて……222

第四章　ハミガキ運動
三年後……230
宝さがし……238
カゲが出てきた……246
きちがいばあさん……259
なかまわれ……265
ひとりぼっち……275
待つな　たたかえ……281
第五章　ブタかい条例反対
多すぎるデモ隊……294
ＯＫ牧場の決闘……307
切れたくさり……324
カゲの正体……337
巨人ロボット……347
台風十六号……358
解　説……上野　瞭

さしえ・カット／久米宏一

ぬすまれた町

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第一章　ユーカイ事件

テレビからとびだした

テレビのブラウン管の上で、バッター＝ボックスの長島が二、三度軽く、バットを、びゅっびゅっと、ふってみせた。

ピッチャーは権藤。

巨人・中日戦だ。

七回の裏。三対二で中日が勝っている。

だが、フォアボールで出た国松が二塁、王が一塁で、いま長打一発が出れば、同点どころか、逆転だ。

ワン・アウトで、ツー・ストライク、ツー・ボール。

権藤が腰をひねり、第五球を投げた。
この第五球はボール。
「ちぇっ、何時かなあ」
ススムはタンスの上の置き時計を見た。
五時半。
長島対権藤なら、ふだんはテレビにかじりついているところだ。
だが、いま、ススムは野球どころではない。
公園で遊んで夕方帰ってくると、ちゃぶ台の上におかあさんの手紙がのっていたのだ。
《おばあさんが病気だという電報が来たので、出かけます。あとから、おとうさんといっしょに六時半の汽車で来てください》
となりのおばさんの話では、キトクという電報が来たそうだ。キトクというのは、死ぬかもしれないことだ。
おばあさんが死ぬかもしれないのに、おとうさんはまだ帰ってこない。まごまごしてると、おばあさん、死んじゃうじゃないか。
とつぜん、テレビのブラウン管の上を、さっと黒い影が走った。
巨人・中日の試合は消えた。
「臨時ニュースを申しあげます」
目のするどい、やせたアナウンサーが出てきた。
「きょう、七月十三日、子どもがユーカイされました」

おや、このアナウンサー、あがってるぞ。きょうは三日じゃないかと、ススムはかべのカレンダーを見あげた。

きょうはたしかに三日の木曜だ。

「ユーカイされた子どもはN県ホージョー市……」

え、するとぼくたちの町じゃないか。

「東小学校五年三組……」

ススムはドキドキした。ススムの学校の、ススムのクラスだ。だれだろう？　ユーカイされたのは――。

その瞬間、アナウンサーはススムを見て、にやっと笑ったようだった。

「イシカワ＝ススムくんです」

アナウンサーは写真をつきだした。スクリーンに、あたらしい自転車に乗ってにこにこしているススムの写真が大写しになった。

ススムは思わずいきをつめた。

バカな、そんなバカなことがあるもんか。

ぼくはユーカイされちゃいない。ぼくは、ちゃんとここでテレビを見ているじゃないか。だれかとまちがえているのだ。きっと……。

だが、アナウンサーの話をきいているうちに、ススムのひざはガクガクしてきた。

「きょう午後四時、ススムくんのおかあさんは祖母キトクの電報を受けとり、小川町へ出かけました。汽車の時間にまにあわないので、遊びにいっていたススムくんには、ちゃぶ台の上に置き

手紙をしました。となりのおばさんの話では、ススムくんは五時すぎに家に帰り、おとうさんの帰りを待つあいだ、テレビを見ていたようです」

テレビは、いまテレビを見ているススムのことをしゃべっている。ススムは大声をあげたくなった。が、声が出ない。のどがヒューヒュー鳴っただけだ。

「おとうさんは六時に帰りました。そのとき、もうススムくんのすがたは見えなくなっていました。だから、ススムくんがユーカイされたのは、午後五時半から六時までのあいだと思われます」

ススムは時計を見た。

五時四十五分。

逃(に)げよう。

ススムは立ちあがった。

またアナウンサーがにやっとしたようだ。

ススムの足がこおりついた。

「ススムくんは、黒い服の目のするどい二十歳(はたち)すぎの男に連れられていきました」

あっ、このアナウンサーは黒い服を着ている。目がするどい。

ススムがこう思ったとき、アナウンサーのすがたがブラウン管いっぱいにひろがりはじめた。同時にブラウン管もするするとのびていく。

ブラウン管が大きくなるにつれ、アナウンサーのすがたはぼやけた。影のようになっていく。

ブラウン管がかべいっぱいの大きさになったとき、やはり影のような声がした。

「ススムくんはこうしてユーカイされました」
声とともに、黒い影はパッとブラウン管をけった。両手をひろげたかっこうで、ふわりとススムの上に落ちかかってきた。

ススムは気がついた。
「権藤第六球投げました。あっ、長島打った。ざんねん、大きなファウルです」
権藤が帽子のひさしにちょっと手をかけているのが、テレビに写った。
時計は五時三十三分。
――おかしい。夢でもみていたのか。
ススムはへやのなかを見まわした。
なんのかわりもない。
いや、ひとつだけかわっていた。音がしている。ブウウンとうなるような、規則正しい機械の音だ。
そうだ。あの音だ。影がススムにおそいかかったとき、何かが影とススムのあいだにとびこんできた。その何かが音をさせていた。
おもてで自動車がとまった。
「やあ、ススム」
父が汗をふきふき、はいってきた。
「いま会社に電話があってね。おかあさんもすぐ帰ってくるそうだ。おばあさんは元気でね、そ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com